

〔慶安三年木曾路記〕木曾梯二ヶ所あらんともいふ、長四十間内十四五ほど欄干あり、尾州黃門〇

直川義の修造なり、その巧なることは、魯般の雲梯ともいふべし、見上れば万丈石山、万木枝を並べ、

見下せば千仞の岩流、唐藍の八入の色に染めり、

〔藤浪記〕めぐりくゞて棧に到る、此橋高き山の腰に傍て、家の壁に棚を釣れるやうに渡して、川をば右になせり、其谷川の深さは千仞もあらんと思ゆるに、水上遙に眺やれば、岩の上に走りかゝる水、千々の糸を亂せるやうに最白く漲れり、其様實に妙にして、水なる哉ともいはまほし、橋より下を指覘ば、左右に大なる岩の白きが幾らともなく重り出て、中は千尋の淵深く、さながら藍の色なるは、誰が家にか染出せると見るも怪くおかしきに、川の向に聳る山の木立茂りて巖嶮きは、何れの工が削なせると又興ありて覺ゆ、昔は此棧山に傍て棧を渡ること一町許なりしを、今は山際を石垣に築て道となし、棧は僅に十間許もやあらん、川の方には欄干あり、橋の爪に高さ三十丈許なる岩の嶮しきを、少削て鐫れる文あり、此石垣、慶安元戊子六月良辰成就焉、畢ト云、此所は尾張亞相義直卿知召所なり、旅人の患を勞はらせ玉ひ、かく營築せ玉ふは、いみじき國の御政にこそ、いと目出たし、

〔千種日記〕上松を出る一里計行て梯あり、長きこと廿間許、欄干などありて、木曾川の入江の道の絶間に掛たり、是なん木曾の梯なりといふ、思ふに木曾の梯は此所に限るべからず、落合より此方爰かしこに梯多し、

〔寶曆二年木曾道記〕木曾掛橋、右は高山峯を並べ、左は岩石峻にして、木曾の大河漲る、谷數十丈の中間に大木をより入れ、角木を並べ、掛橋とす、誠に危き難所なり、上代は今の所より上に道あり、其後新に修復有て、七十五間の掛橋なり、川の方に欄干あり、慶安三年九月廿六日に成就すといへり、